

岩波 国語辞典

第五版

西尾 実  
岩淵悦太郎 編  
水谷 静夫



岩波  
国語  
辞典

第五版

西尾 実  
岩淵悦太郎 編  
水谷 静夫

岩波書店

岩波 国語辞典 第5版 デスク版

1963年4月10日 第1版第1刷発行  
1971年2月5日 第2版第1刷発行  
1979年12月4日 第3版第1刷発行  
1986年10月8日 第4版第1刷発行  
1994年11月10日 第5版第1刷発行 ©  
1996年1月30日 第5版第2刷発行

定価 3600 円  
(本体 3495 円)

編 者 にし西 お尾 みのる実  
いわ岩 ぶち淵 えつ悦 た太 ろう郎  
みず水 たに谷 しず静 お夫  
発 行 者 安 江 良 介  
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5  
発 行 所 岩波 岩 波 書 店  
電 話 案 内 03-5210-4000  
营 業 部 03-5210-4111  
国語辞典編集部 03-5210-4176

印刷：凸版印刷 製本：牧 製 本

ISBN 4-00-080041-8

Printed in Japan

Ⓡく日本複写権センター委託出版物> 本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい。

## 第五版刊行に際して

辞書にまず期待されるのは、むずかしくてまたは知らないで分からない言葉の意味がやさしく書いてあることである。多くの項目について《やさしさ》の要求を満たすのはそれほど困難ではない。ところが、日常よく使われる基本的な語の意味を、その語よりやさしく書くことは、ほとんど望めない。しかも辞書の積義にはもう一つの要件として、《正確・適切》という規準が課せられている。やさしさと正確・適切とが両立すればそれに越したことはないが、言葉によってそうは行かない場合がある。たとえば格助詞の積義などその例であろう。こういう所は、読者にもある程度辛抱して読んでいただくほかない。そのかわり用例を多く入れて、用例から見当がつけやすかつもりである。また一般に、ピンと来るようにという事を意識し過ぎると、とかく狭い用例に即しすぎた勇み足の記述に陥る。記述が無味に傾くとしても勇み足は戒めた。基本的な語の用例も旧版よりふやし、また、「▽」の箇所での補足的解説もかなり入念にした。

第五版では古語項目を削った。四版まで基本的な古語を含めたのは、一つには高校生向けの学習辞典を兼ねるねらいもあったが、現代語の理解に古語の意味を知っておくのが有効な場合が多いからでもあった。削除は単純な作業ではなかった。たとえば「如し」を削ると、今もかなり使われる「ごとき」「ごとく」の形をそれぞれに見出しとして、内容的に重複の多いことを一一書いた上に、両者の関係づけをしなければならぬ。また、古い用法との脈絡を捨て去ったのでは、根無し草の現代日本語になりかねない。これは編者の可とするところではない。古語の見出しや用法に代えて、語源的な古語の形や用法への言及を旧版よりふやした。この部分が単なる語源知識の興味に発するのではないことに注意せられたい。

現代語といっても、明治の後半ぐらいからを念頭に置いている。わが国の生活の変化はこの間に極めて大きかったが、少なくともその程度の広がりて現代語を考えるのでなければ国語を根無し草にしてしまう。一方、生活形態の急激な変化は、

日常生活でごく普通だった道具類など、少し以前の事物を忘れ去らせている。そういうものを表す言葉を辞書から追い出せば、昭和初年の小説さえ読む手掛かりを与えないことになりかねない。むしろそのたぐいの言葉は説明をやや詳しくした。

また、今回の改訂では、主として形容詞・形容動詞について接尾語「き」「み」「げ」などを伴った派生形の表示、漢字母項目の中で一字の字音語としても使うものへの品詞付加のほか、一五〇ほどの項目にはその関連語を掲げる等、旧版にない新たな情報を盛り込んだ。

世上、意味を詳しく記述すると称して、実は指される事柄の説明に流れているものが多い。何を指すかの知見は意味記述のためにも概して必要ではある。しかし意味とは、指されるものことではなく指し方のことである。指される事物・作用・状態の列記を主にすれば、一語に対して数十もの意味番号を設けて記さなければならなくなる場合も珍しくない。はたして一語がそんなに多義だと見るべきであろうか。この辞書は、旧版もそうであったが、意味番号を異にする項の間の関連づけに相当の留意をした。つまり指し方によってまとめるということである。そのため、一番から機械的に番号を振る仕方は採らず、漢数字・算用数字・片仮名で分かつ三段階の、思考科学にいう木構造によっている。本当は「・」を併用した十進分類のような表示にしたかったが、そこまで徹底した方式を採るには至らなかった。しかし、将来の辞書は、この点を含めて、もっと構造化すべきものと思う。また、この辞典の従来の特徴の一つに、「▽」を付して参考情報をいろいろ記した部分が増げられる。この部分について、異なる種類の情報が同居しているので、種類を示す標目を立てるなど工夫の余地があるのではないかとの御意見もいただいている。しかし第五版も形式を改めなかった。これも過度の形式化を避け、形の上でなじみにくいものにしないう方針によつた結果である。いつまでもそうした態度でいてよいか否かは今後の課題としてなお考えたい。

一九九四年七月

編者

## はじめに

しばしば、日本語のあいまいさということが指摘されるが、これは日本語自身の責任というよりも、日本語を使う人の側に責任がありそうである。各人が、一語一語の基本的意味を明確にはとらえていないで、その場その場でもかなり勝手気ままな使い方をするために、社会全体から見ると、結局、その語の意味がきわめてあいまいだということになるのではなからうか。そして、語の基本的意味を明確に記述しておくのは辞書の役目のはずである。

この辞書は、現代の、話し、聞き、読み、書く上で必要な語を収め、それらの意味・用法を明らかにしようとした。携帯用であるため、採録の総語数は五万七千余に過ぎないが、どういう語を採録するかについては、厳密な検討を加えたので、現代人の生活に必要なものはほとんど収めてあるはずである。ただし、固有名詞は除いた。また、現代語の中でも、特に専門家や特殊な人々の間でしか使われないようなものは除いた。また、十分安定したとは言いがたい新語（外来語を含めて）は採録しなかった。採録語を、どこまでも、現代生活に必要なものという観点から厳選したところに、本書の第一の特色があるだろう。

漢字母を、その字音に基づいて、本文中に排列した。これは、単に漢字辞典を国語辞典の中にまぜようとしたものではない。元来、日本語の中には多数の漢語が含まれている。その漢語を構成する単位としての漢字の働きを明確にする必要があると考えたからである。それは、一般に、接頭語や接尾語の説明が、辞書にとって欠くことの出来ないものであるのと同じことと言える。ただし、漢字母の場合には、一般の語と違って、字形や字画をはっきりさせる必要があるもので、特に大きな活字を用いた。なお、漢字母としてあげたのは二千三百余字である。漢字母を造語成分の一つとして本文中に加えたのは、本

書の第二の特色である。

語の意味は必ずしも一つとは限らない。しかし、これまでの多くの辞書は、一語の意味を、あまりにも細かく、しかも並列的に記述して来たきらいがある。そして、どちらかというところ、その語の基本的意味がなおざりにされていたようである。この辞書では、このことを反省して、出来るだけ、一語一語の基本的な意味を説明しようとした。現象的なものよりも、その根底にひそむ根本的な意味を明らかにしようとしたのである。慣用語やことわざを、別の場所に取り出して説明することなく、そのもとになる語の意味の説明と密着させて説明したのも、またこの考え方に基づくものである。この点に、この辞書の第三の特色がある。

なお、日本語の中で最も基礎的な語と思われるものについては、出来るだけ多くの分量をさいて、くわしく意味・用法を記述した。また、意味の説明を記述するのには、まず初めに、現在普通行われている意味・用法を解説した上で、以前行われた用法にも触れるようにした。さらに、これまでの辞書では、一一の語に必ず漢字による表記が当ててあった。それらの中には、実際にはほとんど行われることのなかったものもある。そこで、この辞書では、漢字による表記は、実際の文章においてそのように書く習慣のあったものに限った。また、当用漢字表等の出現に伴って表記形の変ったものは、これをも示した。従って、この辞書は、読むためにも、書くためにも、参考になると思われる。これを本書の第四の特色としたい。

辞書は、全く知らない語を知るためのものでもあるが、また、自分が知っていると思う語でも、その意味や用法を確かめるために引いてみる必要のあるものである。この辞書が多くの人々のために役立ちうるならば、これに越した喜びはない。

一九六三年三月

編者

## 凡例

## 収録した語

- 1 現代語を中心とし、約六万二千語を収録した。日常生活の上で必要な外来語・文語・雅語・成句なども多く取り入れた。
- 2 動詞の連用形から派生した名詞は、場合によって省いた。また、形容詞などに「さ」「げ」「み」「がる」が付いて出来た語も特別のもののかは省いたが、「**誕生**」欄を設けてそれらの派生語を列挙した。
- 3 単語を構成する単位としての、接頭語・接尾語などの造語成分も、出来るだけ取り上げた。漢字母を入れたのも、一つ一つの漢字を造語成分と見たからである。
- 4 単語と単語とが結合して出来た複合語のほかに、単語と単語とが慣用的に結びついているものも「**連語**」と呼んで取り上げた。

## 見出し

## 1 見出し

- ア 見出しには原則として平仮名を用い、現代仮名遣いで示した。  
 イ 外来語は片仮名で示し、長音には「ー」を用いた。

## アーチ

なお、一語一語の表記は、内閣告示「外来語の表記」を参考にした。

## バレエ

## ジェントルマン

ウ 活用語は原則として終止形で掲げた。語幹と語尾との区別が立つものは、その間に「ー」を入れて仕切った。

## 凡例

きゝる【切る】〔五他〕  
 きゝれる【切れる】〔下一自〕  
 あかるい【明るい】〔形〕  
 たのしい【楽しい】〔形〕  
 エ 接頭語・接尾語を一つの独立項目として立てた場合には、次のように示した。

## こゝ 接頭語

## きゝ 接尾語

- 2 歴史的仮名遣い  
 ア 和語においては、見出しの次に歴史的仮名遣いを示した。ただし、複合語で一部分が見出しの現代仮名遣いと同一である場合は、その部分を：で示した。

## あいだ 間

## あいて 相手

## あおがえる 青蛙

- 3 表記形  
 イ 漢語においては、原則として字音仮名遣いを示さなかった。ただし、「様」「相」のように、古くから仮名書きにすることの多かった語は、特に「やう」「さう」とその字音仮名遣いを示した。

ア 【一】の中に、その語の書き表し方を示した。ただし、見出しの仮名と全く同じ場合は省略した。なお、表記形がいくつかある場合は並べてあげた。

イ 漢字の字体は、常用漢字・人名用漢字は新字体、それ以外の漢字は原則として正字体を用いた。

ウ 漢字で書く語については、常用漢字表に取り上げられているものと、それ以外のものとを、次の記号を用いて示した。

印なし 常用漢字表にある字



- △ 常用漢字表にある字であるが、音訓欄にその音訓が取り上げられていない場合  
ちひろ【千尋】
- × 常用漢字表外の字。人名用漢字を含む。  
いちのとり【一の西】
- へ 常用漢字表付表にある、一続きの漢字で特定の読みを表す、いわゆる熟字訓を示す場合  
いなか【田舎】
- へ 前項以外の熟字訓を示す場合  
のり【海苔】
- エ 送り仮名は内閣告示「送り仮名の付け方」を参考としたが、送り仮名法は時代によっても異なるので、送らないことが古い習慣である場合、または送っても送らなくてもよい場合には、その部分を( )でくくった。  
あみもの【編(み)物】  
うまれかわる【生(ま)れ変(わる)】
- オ 西洋系の外来語で、ローマ字で書く形が普通である場合には、この欄にその形を示した。  
ピーティーエー【PTA】
- 4 品詞など(巻末「品詞概説」参照。品詞などの略語は見返し「略語表」参照)
- ア 『』の中にその語の品詞その他の文法上の性質を示した。  
イ 次の場合には、多くその注記を省略した。  
a 名詞。ただし、特に必要がある時は明記した。  
b 単独項目として出した接頭語・接尾語  
c 漢字母

- ウ 動詞はいちいち動詞であることを断っていないが、活用の種類と自動詞・他動詞の区別とを示した。  
ゆく【行く】『五自』  
よむ【読む】『五他』  
いきる【生きる】『上一自』  
かかげる【掲げる】『下一他』
- エ 形容動詞的に用いられるものは、次のような形で示した。  
しずか【静か】『タナ』  
せいしん【清新・生新】『タナ』  
ようよう【洋洋】『トタル』
- オ 漢語・外来語名詞で、「する」を付けて動詞としても用いるもの、あるいは、形容動詞的にも用いるものは、次のような形で示した。  
うんどう【運動】『名・ス目』  
アタック【名・ス他』  
けんこう【健康】『名・タナ』  
いってつ【一徹】『名カ』  
せんかん【濼・濼】①『名・トタル』
- カ 副詞で、形容動詞的にも用いるものは、次のような形で示した。  
いかが【如何】『副・タナ』  
とくべつ【特別】『副・タナ』  
たいてい【大抵】『副カ』  
きんぜん【欣然】『副・トタル』
- キ 「と」を伴って副詞として用い、また「する」を付けて動詞としても用いるものは、次のような形で示した。  
いきいき【生き生き】『トス自』  
こせこせ【トス自』

ク 「に」を伴って副詞として用い、また「なる」を伴って連体詞としても用いるものは、次のような形で示した。

いか〔如何〕〔二ナル〕

ケ 単語と単語とが結びついた形が慣用的に用いられるものは、この欄に「連語」と記した。

いわずかたらずは〔言わず語らず〕〔連語〕

うかぬかおは〔浮かぬ顔〕〔連語〕

### 見出しの並べ方

1 見出しの排列は五十音順に従った。

2 五十音順で順序のきまらないものは、次のように定めた。

ア 「ん」は「を」のあとに置く。

イ 清音・濁音・半濁音の順にする。

こうどう【荒唐】

こうどう【行動】

こうどう【強盗】

こうどう【合同】

ほんぶ【本部】

ほんぶ【本譜】

ほんぶ【凡夫】

ポンブ

ウ 促音の「っ」、拗音(は)の「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ、「っ」「ゃ」「ゅ」のあとに置く。

ねつき【寝付き】

ねつき【熱気】

きゆう【杞憂】

きゆう【炎】

エ 外来語を表す時の小字の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」は、普通の仮名のあとに置く。

ふあん【不安】

ファン

オ 長音符号ーは、その場合の発音が、ア・イ・ウ・エ・オのいずれかであることによって、それぞれの音を表す仮名と同じものと認め

凡例

る。

ガーターは ガアタア の位置に置く

コービーは コオヒイ の位置に置く

そして、普通の仮名のあとに置く。

きい【奇異】

キー

3 見出しの、仮名で書いた形が全く同じである場合には、原則として次のように排列した。

ア 文法的性質の上から次のような順序。

活用語 動詞(五段・上一・下一・変格の順) 動詞型接尾語

形容詞 形容詞型接尾語

助動詞

無活用語 名詞 代名詞 形容動詞語幹 副詞

接頭語 無活用接尾語

連体詞 接統詞 感動詞

助詞

イ 和語 漢語 外来語 漢字母 の順序。

4 同音語で意味の似たものは、場合によって同一見出しのもとに収めた。

かしよう ①【過小】……………②【過少】……………。

5 外来語の場合には、別語であっても、仮名で書いた形が同一であると

きは、一つの見出しのもとに収めた。

ライト ①光。光線。……………④……………⑤(1)~(4)はlight

⑤右。⑥……………△(5)⑥はright

6 次のような場合には、見出しの語を解説した次に、その語を含む複合語を見出し語に追い込んで掲げ、説明した。見出し語と重複する仮名の部分はーで省略した。

## 凡例

ア 和語では二つ以上の単語で出来ている複合語が、さらに他の語と合して複合語を作った場合。

「ちどり(千鳥)」に対して「ちどりあし(千鳥足)」「ちどりがけ(千鳥掛)」「ちどりごうし(千鳥格子)」

イ 漢語では、漢字二字以上で出来ている熟語が、さらに他の語と合して複合語を作った場合。

「安全」に対して「安全器」「安全装置」「安全地帯」「安全ピン」「安全弁」など

ウ 外来語では、その語と他の語と合して複合語を作った場合。

「ガス」に対して「ガス糸」「ガスタンク」「ガス灯」「ガスマスク」「ガスレンジ」

## 説明

1 基礎的な語と考えられるものには、特にくわしい説明を加えた。

2 その語の現象的な意味をいちいち細かく分けて説明するよりも、基本的な意味を明らかにするようにした。

3 一語にいくつかの意味を立てた場合には、時代的に古い意味から始めることなく、出来るだけ現代語として最も普通に行われている意味から始める方針をとった。

4 意味を分類して記述する場合には、次のような語義区分を立てた。

ア ①②③…… 最も普通の場合。

イ ④⑤⑥…… 右の内部をさらに細分するとき。

ウ ㊦㊧㊨…… ①②③……よりも大きな分類が必要とき。

これらの語義番号を説明文中もしくは他の項目から参照のために使う場合には、それぞれ(1)・(2)・(3)のように括弧付きの形とした。

5 その見出しの語が、常に一定の成句の中に現れるようなものは、その成句の形を、説明の初めに『』に包んで掲げ、その成句全体につ

いての意味を説明した。

あげあし【揚(げ)足】『—を取る』人の言葉じりや言い誤りをとらえて、なじったり皮肉を言ったりする。

6 語の接続の仕方などの文法的な説明は、『』に包んで、その項の説明の最初に置いた。

いっさい【一切】①…… ②今下に打消しを伴って、副詞的に『全』。全然。

7 その意味が特殊の範囲で使われるものであって、理解のために必要と認められるものは、『』に包んで、その語の分類を示した。たとえば、

〔仏〕(＝仏教語) 〔俗〕(＝俗語)  
〔宗教〕 〔哲学〕 〔法律〕 〔経済〕 〔取引〕 〔言語〕  
〔数学〕 〔物理〕 〔化学〕 〔天文〕 〔音楽〕 〔美術〕

8 意味の理解を助けるため必要な場合、↑を付けて対義語を示した。

げんいん【原因】〔名・ス自〕……。↓結果  
他の項目を参照すべきものは、↓を付けて、その項目を示した。

すいどう【隧道】↓トンネル  
かでん【瓜田】『—の履(3)』嫌疑を受ける行為は避けた方がよいというたとえ。……↓りか(李下)

10 意味の理解を助け、また実際の使い方がわかるように、つとめて用例を『』に包んで掲げた。また、用例のうち、意味のわかりにくいものや、ことわざ・成句などについては、その解釈を( )に包んで掲げた。

きよくじつ【×旭日】朝日。「—昇天の勢い」  
あら【新】……。『年寄りに—湯(＝まだだれもはいつていない湯)は毒』

あく【灰汁】①……。③……。―の抜けた人(俗気がない、または粋(粋)な人)

11 文学作品から用例を引いた場合は、その書名(略称)または作者名を用例のあとに(一)に包んで小さく示した。たとえば、

(記) 古事記 (万) 万葉集 (古今) 古今和歌集

(芭蕉) 松尾芭蕉の句 (漱石) 夏目漱石の作品

12 用例中の、見出し語に当たる部分は―で略した。ただし、活用語で見出しの形とちがう活用形が使われている場合は、語幹を―で表し、・を付けて語尾を添えた。また、語形全体がちがう形の場合は、略さないでこれを太字で示した。

あいかん【哀歓】……。―を共にする」

まなぶ【学ぶ】【五他】①……。「先人に―」②……。「よく

―びよく遊べ」

た【助動】……。①……。⑦……。「勝負あつ―」……「雨が降

つたら延期する」

13 意味によって複数の漢字表記を使い分ける場合は、その意味説明のあとに最も普通の漢字を「」に包んで示した。

つとめる【努める・務める・勤める】【下一他】①力を尽くす。……。【努】「完成に―」②役目を受け持つ。……。

【務】「案内役を―」③(役所・会社などに通つて)仕事につく。……。【勤】「会社に―」④仏道修行をする。【勤

14 ▽を付けて、語源・原義、故事、類義語との区別、用法上の注意、語形のゆれ、外来語の原つづりなど、多角的な補足説明を加えた。▽による注記は、特定の語義区分に関するものはその直後に、見出し語全体にかかわるものは原則として項目の末尾に置いた。

15 外来語の原つづりは、日本語に直接はといったと思われる言語をあげた。また、同時にその言語名を記した。ただし、英語の場合は原則

凡例

として省略した。

アーチ①……。③……。Arch

トルソー……。▽トルソ torso

ハンカチ……。▽handkerchief から。

和製語についても、想定される原つづりを示した。

サラリー……。―マン……。▽日本で salary と man

とを合わせて作った語。

16 派生欄を設け、形容詞・形容動詞の語幹に接尾語「ぎ」「げ」「み」「がる」が付いて出来た派生語を掲げた。その派生語が見出しとして立っている場合は\*を付けた。

おもい【重い】【形】……。派生「さ・いげ・み・がる

17 関連欄を設け、多様な表現に役立つ類義語・関連語を一括して掲げた。

あさ【朝】……。関連 暁・曙(ほろ)・早朝・未明・黎明(めい)・薄

明・払暁(はら)・早暁・明け方・有明・夜明け・東雲(あ)……

### 漢字母項目

漢語の造語成分という観点を中心にしてえらんだ漢字を、その字の代表音に従って、本文中に排列した。

#### 1 表記形

ア【ア】の中に示した漢字は、字形・字画をはっきりさせるために、

一般項目より大きい活字を使った。

イ 漢字には、次のような記号を右肩に付けた。

印なし 次項 \* 以外の常用漢字

\* 常用漢字のうち、義務教育で読み書きを教える字、いわ

ゆる教育漢字

人名用漢字

× 常用漢字・人名用漢字以外の漢字

ちょう【超】 ちょう【\*長】 ちょう【暢】

ちょう【<sup>×</sup>諜】

ウ 『』の次に「」に包んで旧字体を示した。

えん【\*円】【圓】 み【弥】【彌】

## 2 音訓

ア 一般に使われる音を片仮名で、訓を平仮名で示した。

イ 音は現代仮名遣いで示し、字音仮名遣いが現代仮名遣いとちがう場合は、その下に（ ）に包んで示した。

ウ 音・訓のうち、常用漢字表に取り上げられているものは太字で示した。

かい【\*回】カイ(クワイ) まわる まわす エ(エ) かくる

## 3 その他

ア 単独で語としての用法がある場合には、品詞その他の文法上の性質を『』に包んで示した。ただし、『』の表示がないときは造語成分としての意味を表す。

みよう【妙】ミヨウ(メウ) ①【造・名】……  
たえ ③【造・タナ】……

イ 意味説明のあとに、その用例を「」に包んで掲げた。

さ【\*差】サシ シャ ①【造・名】……。「差がある」「差異・差違・差等……千差万別」

ウ その字の比較的良好に使用される古字・正字・同字などを、意味説明のあとに▽を付けて注したものもある。

か【\*歌】カ うた ①…… ②…… ▽「哥」は古字、「謠」は同字。

# あ

あ【亜】(ア) ①次ぐ。②何かを規準に取り、それに基づき、③何かを規準に取らず、④化学で、無機酸の酸素原子が少くないものに冠する。「亜硫酸・亜砒酸」⑤アに当たる外国語音を表すに使う。「亜米利加」⑥亜米利加(ア)の略。⑦「亜細亜」の略。「亜欧・東亜」⑧「亜爾然丁」の略。⑨「亜」の代用として用いられることがある。「白亜・亜鉛」

あ【啞】ア ①肉体的な障害者のため、言語を発音して話すことができないこと。その人。「盲啞・聾啞」②驚きのため口のきけない状態。「啞然」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あ【阿】ア おもむ。①岸。まがりかど。隈。おか。「山阿」②よりかかぬ。おもむ。③人を親しんで呼ぶ時に冠する。「阿世・阿母」④日本で、女の名に冠して愛称とする時は「お」とよむ。「阿国歌舞伎」⑤阿千(ア)⑥アに当たる外国語音を表すに使う。⑦梵語等の第一字母の音訳。その他の外国語の音訳にも使う。「阿字・阿吽」⑧阿弥陀(ア)・阿修羅(ア)・阿片(ア)⑨特に、「阿弗利加」の略。「南阿戦争」⑩「阿波」の略。「阿州」

あーあ

アース(名)ス他 大地を電路の一部として利用するために、電路を地面につなぐこと。電気器械と地面との間に電路を作って電気を大地に逃がす装置。接地。Earth (地球。大地)

あだ(連語) ああいう事。わけ。様子だ。親がーから子でもあだらしがない。ーのこうだの(何やかやと)指示副詞 ああ+指定の助動詞だ

アーチ ①上方が半円形をなす構造物。家の入口、橋、トンネルなど。せりも。②竹や木の骨組みをスギ・ヒノキなどの青葉で包んだ門。緑門。③野球で、ホームランのこと。「ーをかける」Arch

アーチエリー 西洋式の弓。洋弓。また、それを用いて行う競技。Archery

アーティスト 芸術家。特に、美術家・演奏家。アーティスト。Artist

アート芸術。美術。「モダン」Artist ①紙。紙面に鉱物質の塗料を塗り、なめらかにした洋紙。写真版の印刷に多く用いる。アートペーパー。Art paper

アーベント 一定の題目で夕方から開かれる、演奏会・講演会などの催し。ゲーター。Vej. Abend(=夕)

アーム ①腕。「ーチェア」②器具・機械から腕状にのびている部分。「レコードプレーヤーの」Arm

アーメン(感)キリスト教で、いのりの後にとなえる語。V. Amen(=まこと。確かに)

アーモンド ばら科の落葉高木。中央アジア原産。葉果実を鎮める薬となる。アモンド。Almond

アル 面積の単位。記号。ア。アルは100平方メートル。三。坪強。V. Are

アル デコ 一九二〇～三〇年代にフランスを中心にヨーロッパで流行した裝飾様式。直線を基調とした実用的なデザインが特徴。Art Deco

アル ストウオー 十九世紀末から二十世紀初頭にかけてヨーロッパに流行した裝飾様式。植物をモチーフにした流れるような曲線が特徴。Art Nouveau

あい(相) ①動詞などの上に「組」になり、または向かい合う関係にある意を表す。いっしょに。互いに。「携え

て」「対する」「宿」②動詞の上に「語調を重々しくするのに使。「いかかー成りましようか」「変わらず」③あうの運用形から。

あい(相) ①すま。絶えま。あいだ(2) ②あいきょうげん

あいま(藍) ①秋、穂状の赤い小花をつける、たて科の一年生植物。青はより出)でてより青し(弟子が先生よりもすぐれていることのとえ。しゅつらん)②この例の二番目の「あいま」は(2)の意。③藍(1)から取った濃い青色の染料。「染め」それで染めた色。インジゴ。V. 今化学的に合成もする。

あい(愛) そのものの価値を認め、強く引きつけられる気持ち。⑦かわいがり。いづくしむ心。「子にそそぐ」。いづくしむ心。⑧「神の」。いたわりの心。「人類」⑨大事なものとして慕う心。「母への」。特に、男女間の慕い寄る心。恋。⑩その価値を認め、大事に思う心。「真理への」V. あい愛

あい(愛) アイ いとしむ。おめする。①かわいがる。いとむ。いたわる。「愛憎・愛妻・愛娘(持・持)・愛情・恩愛・慈愛・偏愛・博愛・寵愛(持・持)・親愛・敬愛・鍾愛(持・持)・情愛・溺愛(持・持)・母性愛」②愛が思いあう。親しみのことよりかかる。「愛執」③愛欲・相愛・恋愛・求愛」④好む。面白く思う。「愛好・愛玩・愛読」⑤大切にする。「愛郷・愛護・自愛・友愛・祖国愛・遺愛」⑥惜しむ。「愛惜・割愛」⑦愛蘭(持)の略。V. あい愛

あい(哀) アイ あわれ。あなむ。①あわれむ。「哀憫」しむ。悲しい。心をいためる。「哀歎・哀愁・哀傷・哀悼・悲哀・喜怒哀楽」②あわれみをもよおすように熱心に望む。「哀願・哀訴」

あい(埃) アイ 土ほこり。ちり。こみ。「埃土・塵」

あい(隘) アイ (土地が)せまい。細まっている。「狹隘」

あい(穢) アイワイエ(子) けがれる。よごれる。⑦けがれる。よごれる。⑧「汚穢(汚)」。⑨悪い。「穢徳」⑩けがらわしい。不浄。不潔。「穢土」V

あ

もと、雑草がはえ茂って荒れること。

アイアール【IR】↓じょうほうけんきく。▷information retrievalの略。

あいあい【義議】「トタル」多く盛んなさま。「和氣」(一座・仲間)の間に、なごやかに楽しみ合う気分が満ちているさま。

あいあいがき【相合傘】一本のかきを男女がふたりでさすこと。あいがき。

あいいく【愛育】(名・ス他)かわいがって育てること。

あいれない【相容れない】「連語」いっしょには成り立たない。両立しない。「両者の利害は」。互いに他方が許せない。「彼らは—性格の持主だ」▽「ない」の部分は、「ぬ」ませんでもよく、それら三つの活用形でもよい。

あいじん【合印】帳簿・書類を他の帳簿・書類と引き合わせたりするしに押す判。あいはん。▽あいにしよ「と読めば別の意」。

あいじん【愛飲】(名・ス他)好んで飲むこと。

あいうち【相撃ち・相打ち・相討ち】(武術で)双方が同時に相手をうつこと。転じて、勝負なし。あいに。—になる。

あいえん【愛煙】タバコが好きなど。「一家」

あいえん【合縁奇縁・合縁機縁】人の交わりには互いに気がよく合う合わないがあつて、それは不思議な縁によるのだということ。

あいおい【相生】①一つの所から互いに接してはえ出ること。▽同首なので「相老」の意に通われる。

あいか【哀歌】悲しみの心を述べた歌。エレジー。

あいかき【合鍵】一つのかぎのほか、その錠に合う他のかぎ。また、その錠に合わせて作ったかぎ。

あいかた【合方】①歌い手に対し、三味線(さんずみ)をひく者。②芝居のせりふの間などに入れる三味線。③長唄(ながうた)の合(あ)の手、長いもの。④歌曲の囃子方(はやし)。

あいがた【相方】①あいて(1)。②遊客の相手の遊女。▽②は多く「敵娼」と書く。

あいがも【間鴨合鴨】マガモとアオクビアヒルとの雑種。肉は食用。

あいかわらず【相愛(わ)らず】「連語」今までのとおりいつとも同じく。▽皆一元気で暮し向きは「だ」▽相も変わらずの形も使う。丁寧に言う時には「相愛わりませす」。

あいかん【哀感】ものがなし感じ。悲哀感。

あいかん【哀願】かなしみとよるこび。—を共にする。

あいかん【哀願】(名・ス自他)人の同情心にうったえて物を頼み願うこと。

あいがん【愛玩】(名・ス他)大切にしておきたいがること。また、おもちゃにして慰みとする。「動物」

あいき【愛着】①春や秋に着る洋服。あいく。▽夏と冬との間に着るから。②上着と下着との間に着る衣服。

あいきどう【愛氣道】古い柔術の流れをくみ、当て身わざ、関節わざを主とする武術。

あいきやく【相客】①宿屋で同室にとまり合わせた客。②同席の客。

あいきよう【愛敬・愛嬌】①(女子供などが)にこにこしてかわいらしいこと。「—のある娘」。転じて、(人・動物が)こっけいなこと。「猿は—者だ」②商人・芸人が他から好かれようと、人付きよくふるまうこと。「—を振りまく」

あいきよう【愛郷】自分の生まれた土地(=故郷)を愛すること。「—心」

あいきょうけん【開狂言】能の中で狂言師の受け持つ演技、またはその役柄。▽単に「あい」とも言う。

あいきん【愛吟】(名・ス他)詩歌を好んで口ずさむこと。

あいきん【合口】①つばのない短刀。九寸五分(計)。▽「—首」とも書く。②相手として調子のあること。「彼—は—がい」

あいくるしい【愛くるしい】形見るからにかわいらしいこと。「—笑顔」「—生るよけ」

あいくん【愛犬】①かわいがっている犬。②犬をかわいがること。「—家」

あいい【愛願】(客が商人・芸人などを)最良(よし)にし、目をかけ引き立てること。「お客様の御—にむくいて」▽最良

傾される側から言う語。

あいご【愛護】(名・ス他)かわいがってかばい守ること。「動物」

あいごう【愛好】(名・ス他)物事を愛し好むこと。

あいごく【愛国】自分の国を愛すること。「—者」「—心」

あいごば【合言葉】①前もって打ち合わせである合図の言葉。「山」と問いかけたら「川」と答えるなど、おたがいが仲間であることを示すもの。②大勢の間で、ある主張の旗印として使う言葉。標語。モットー。「この団体の—は愛です」

アイコン【電子計算機に与える指示・命令などを記号化した画面上に示したもの】。data

あいきさい【愛妻】①大事にしている妻。②妻を愛し大事にすること。「—家」

あいきつ【挨拶】(名・ス自)①人と会ったとき取りかわす儀礼的な動作・言葉。「初対面の—」②儀式・就任・離任などの時祝意・謝意・親愛の意などを述べる言葉。「一場の—を述べる」「—状」③応対。返事。「知らせたのに何の—もない」▽もと、禪家で(師と修行僧が問答を交わす意。團圓礼・敬礼・最敬礼・答礼・拝礼・目礼・黙礼・握手・お辞儀・会釈・脱帽・合掌・平身低頭・三拝九拝・口上

あいに【哀詩】悲しい出来事を記したもの。「女工」

あいに【愛児】親がかわがっている子供。いとこ。

アイシー【IC】ごく小さな板に多くのトランジスタ・ダイオードなどを組みこんだ、電子回路の素子。集積回路。Integrated circuitの略。

あいじやく【愛着】(名・ス自)愛情にひかれて思い切れないこと。▽あいちやくとも言う。もと仏教で、欲望にとられ、そこから心が離れられないこと。

アイシャドー【まぶたに青色・茶色などの化粧をすること。また、その化粧に塗るもの。顔に陰影をあたえる】。shadow

あいにしよ【哀愁】もの悲しい。うら悲しい感じ。

あいにしよ【愛敬】欲望にとられて心が離れないこと。愛着(あいじやく)から。

あいにしよ【愛書】本が好きなこと。「—家」

あいにしよ【相性・合性】①陰陽五行説で、男女の性(よ)

が合うこと。生年月日を五行に割り当て、水と木、土と金  
を相性とするなど。結婚などによいとした。②性格のよ  
く合うこと。「一がよい」。

あいしよう【哀傷】悲しいたむこと。いたましい感じ。  
あいしよう【愛唱】名ス他 ①好んで歌うこと。「一歌」  
②好んで口ずさむこと。「牧水の歌を―する」▽(2)は「愛  
誦」とも書く。

あいしよう【愛妾】気に入りのめかけ。  
あいしよう【愛称】親愛の気持を含めて呼ぶ特別の名ま  
え。▽人間以外の物についても使う。  
あいじよう【愛嬢】親がかわいがっている娘。まなむすめ。  
あいじよう【愛情】相手こそぐ愛の気持。⑦深く愛する  
あたたかな心。「母の―」仕事に―を持つ」⑧異性を恋  
い慕う感情。

あいじよう【合印】①味方どうしを敵と間違えないよう  
に、区別につけるしるし。②裁縫で、二枚以上の布を正し  
く合わせるためのしるし。▽(2)は多く「合標」と書く。な  
お、「あいん」と読めば別の意。

あいじん【愛人】①恋愛の相手。こいびと。▽第二次大戦  
後、新聞等で「情婦」「情夫」を避けてこの語を使い、「恋人  
でなく―だ」のような表現も生じた。②だれかれにかた  
よらず人を愛すること。「敬天―」

あいす【愛す】①愛する。②あいする。  
アイス①水。▽(2)「俗」高利貸。▽(3)「水」と音が  
通るので、明治時代にもじって使った。③アイスキ  
ャンデー「アイスクリーム」の略。▽日本で「アイス」果  
汁などを冷凍した。一種の水菓子。▽日本で「アイス」  
〇〇とを合わせて作った語。▽クリーム牛乳、卵の黄  
身に砂糖・香料を加え、ませ合わせて凍らせた菓子。水菓  
子。▽Ice cream ― ホッピクス 氷を使って食品などを  
冷やす。携帯用の冷蔵庫。▽Icebox ― ホッケー 氷  
上でスケートをはいて遊ぶホッケー。▽Ice hockey

あいす【愛する】①「サ変他」それに対し愛をそそぐ。⑦  
かわいがり、いつくしむ。「子を―」。心から大切に思う。  
「国を―」⑧異性を恋い慕う。⑨物事を強く好む。「酒を  
―」

あいしよーあいて

あ

あいせい【愛嬌】気に入りのむこ。  
あいせき【愛せき】名ス他 人の死をかなしみ惜しむこと。  
「―に堪えない」

あいせき【愛惜】名ス他 大切にし、手放したり損ねたり  
するのを惜しむこと。「―の念」。氣に入つて大切にする  
こと。故人の「名した品」

あいせつ【哀切】名ス身にしみ通つて(一切)悲しい(一  
哀ごと)。「―を極める」(團圓)ま

あいせつ【哀絶】非常に悲しいこと。  
あいぜん【愛染】①煩惱。▽愛着。染じに染まる意から  
出た。②愛染明王の略。「―みょうおう」「明王」  
【仏】愛欲などの欲望がそのまま悟りであることを表す  
明王。赤身で三目六臂(六臂)怒りの相をあらわした像  
に作られる。

アイゼン 鉄製の登山用かんじき。▽Zwei der Eisenzeit から。  
あいそ【哀訴】名ス自他 同情を求めてなげき訴えるこ  
と。

あいそ【愛想】①にこやかで人づきのよいこと。「―のよ  
い人」②人に寄せる愛情・好意。「―がつきる」(あきれ  
ていやになる)「―をつかさ」(いやになつて取り合な  
くなる)「おー(おせじ)を言う」③料理屋の勘定。「ね  
えさき、おー」▽あいそう【転】「―つか」(―尽か  
し)「愛想がつき取り合わなくなること。また、その言  
葉や態度。―わらい【笑】」相手の機嫌を取ろう  
としてする作り笑い。追従(お)笑い。お世辞笑い。

あいそう【愛想】あいそ愛想  
あいぞう【愛憎】愛すること憎むこと。(個人個人に対す  
る)すききらい。「―の念がはなだしい」  
あいぞう【愛蔵】名ス他 好きで、大事にしまつておくこ  
と。「一版」

あいそく【愛息】親がかわいがっているむすこ。  
アイソトープ 同一元素で原子量が異なるもの。同位元素。  
同位体。▽Isotope

あいだ【間】①これとそれとの二つのものにはさまれた  
部分。「大阪から広島までの―の都市」「〇と〇の―に  
ある素数。特に限られた一続きの間隔。時間。そこま  
での―はいい道だ」「三日の―高熱が続いた」▽(2)の  
転。②空間や時間の、ものがとぎれている(割合に小さ

い)隔たり。すきま。絶えま。「木立の―から山が見える」  
「爆発音が―を置いて響く」▽空間について言うのが原  
義。③この―「現在に近い過去を漠然とさす言い方」  
④関係。あいだから。仲。彼との―がますますなる。▽(1)  
の転。⑤候文で接統助詞的に「…の」で。「お送り致し候  
御受納被下度(被)候」▽(1)の転。それもこれも一統  
きの限られた範囲内にあるというらえ方から。

あいたい【相対】さしむかい。第三者を入れず直接の当  
事者が(向かい合いで)処置すること。「―のお話を願お  
う」で約束した事だ。「―すく」の相談。▽「そうたい」  
と読めば別の意。「―すく」↓あいたい  
あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
「四角形の―二辺」対立する。「―意見」

あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あいたい【相対】相対する【サ変自】互いに向かい合う。  
あいたい【相対】人と人との関係。⑦血族・親類の統  
きあい。統【間柄】親子の―で水くさい」⑧つきあい。関  
係。「二人の―はよくない」

あ



アイデア (新たに始める) 物事の、中核となる考え。着想。  
 アイデア。「よい」が浮かぶ。▽idea  
 アイディーカード [IDカード] その人であると識別するために名前・身分などをするカード。身分証明書。▽IDは identity, identification の略。  
 あいでしよ [相席] 同じ先生や師匠について、共に学ぶ弟子。同門。  
 アイテム ①項目。事項。②(衣服の)品目。③装身具。持ち物。item  
 アイデンティティー それが、他とは異なる、まさにそのものであるということ。自己同一性。「自分の」を主張する。▽identity  
 あいどう [哀悼] (名・ス他) 人の死を悲しみいたむこと。「謹んで」の意を表す。  
 あいじく [愛読] (名・ス他) (その書物を) 好んで読むこと。「一書」一書。  
 アイドル ①偶像。崇拜するもの。②人気のある若いタレント。idol  
 あいなめ あいなめ科の浅海魚。普通、緑を帯びた茶色。長さ約三〇センチ。食用。あぶらめ。  
 あいなる [相成る] (五自) ↓あい(相) (2)  
 あいにく [生憎] (副・タタ) それをしようとするのに、都合の悪い状態にあること。ぐあいが悪いことに。「一」(と)かぜを引いて欠席した「遠足には一の雨だ」一なことに「おーさま」▽あやにくの転。  
 あいのり [合の子・間の子] ①種類の違う生物または異人種の間に生まれた子。雑種。混血児。②どちらともつかない中間のもの。  
 あいのて [合の手・間の手] ①(三味線(歌))曲で、歌と歌との間に入れる三味線だけの間奏。②話・物事の進行に応じて、他の者がさしはさむ言葉。物事。「一」を入れる。  
 あいのり [相乗り] ①(車などに) いっしょに乗ること。②比喩的に、共同で(または他者の企画に加わって)事業を行うこと。  
 あいば [愛馬] ①かわいがって大事にしている馬。②馬をかわいがること。  
 あいはん [合判] ① ↓あいいん(合印)。② 連帯でおす

印。  
 あいはん [合判・合判] 紙の大きさの一種。①ノートなどで、仕上がり寸法が縦七寸約二二センチ、横五寸(約一五センチ)の大きさ。②写真乾板で小判と中判とのあいだの寸法。縦一三センチ弱、横一〇センチ強。③浮世絵版画で縦一尺一寸(約三三センチ)、横七寸五分(約二二センチ)のもの。  
 あいびき [合い] 挽き) 牛肉と豚肉とをまぜてひいた挽き肉。「×逢引・婿曳」(愛しあっている)男女が(ひそかに)あうこと。ランデブー。  
 あいふ [合符] 駅で手荷物を引き受けた時、その証拠に渡す券。  
 あいぶ [愛撫] (名・ス他) などでさすってかわいがること。また、などでさするばかりに深く愛すること。  
 あいふく [合服] (間服) ↓あいき(1)  
 あいふた [合礼] 品物をあずかった証拠に渡す札。  
 あいべつ [合別] 愛別離苦「仏」八苦の一つ。親子・兄弟・夫婦など愛する人と別れる苦しみ。  
 あいべや [相部屋] (宿屋などで) 他の客と同じ部屋に泊まること。部屋を同じくすること。  
 あいば [愛慕] (名・ス他) 深く愛し慕うこと。  
 あいぼう [相棒] 共に事をする者。なまかま。▽もど、一つの駕籠(籠)をいっしょにかつぐ相手。  
 アイボリー 象牙(象)のような色。乳白色。▽ivory (象牙)  
 あいま [合間] ある事や物と他の事や物とのあいだ。ひま。「仕事の」に「一服する」▽時間的な意味に多く使う。  
 あいまい [曖昧] (タナ) 内容がはっきりとらえにくく、はっきりしないこと。二つ(以上)の意味にとれること。「一」な文章。「一」模糊(糊)。(あ)ふやなこと (風生) ↓「一」屋。表向きは料理屋・宿屋に見えながら実は売春婦を置いているいかがわしい稼業の家。  
 あいまつ [相俟つて] (連語) 互いに働きかけあって、いっしょになって。「昨日は日曜だったので、好天気と一人出が多かった二両間」  
 あいみがたい [相身互い] 同じ境遇・身分を同情し合うこと。「武士は」

あいまち [相持ち] ①いっしょに持つこと。特に、平等に負担すること。②代わりあって持つこと。  
 あいやく [相役] 同じ役(についている者)。同僚。  
 あいやど [相宿] 同じ宿屋または同じ部屋に泊まりあわせること。  
 あいよう [愛用] (名・ス他) 気に入って、いつも使うこと。使いつけ。「一」のカメラ。  
 あいよく [愛欲・愛慾] 異性にたいする性愛の欲望。  
 あいよめ [相嫁] 夫の兄弟の妻。▽その妻とうして言う。  
 あいらく [哀楽] 悲しみと楽しみ。「喜怒哀」  
 あいらしい [愛らしい] (形) かわいらしい。「一」すがた (風生) ↓  
 アイリス あやめ科の植物の一属。アヤメ・ハナショウブなどを含む。▽ギリシア神話の女神の名 Iris から。  
 あいれん [哀憐] かなしみあわれむこと。あわれみ。  
 あいれん [愛憐] いたくしむこと。なまかま。  
 あいろ [文色] 様子のもの区別。けじめ。「一」がつかぬ。  
 あいろ [隘路] ①狭くわしい道。特に、大部隊などが通れないような狭い道。②物事をするのに妨げとなる困難。障害。難関。  
 アイロン ①皮肉。②反語。▽irony  
 アイロン ①衣服のしわを伸ばし、折り目をつけるなど、形を整えるのに用いる道具。②髪を毛をちぢらせる鏡(鏡)。Diron  
 あいわ [哀話] かわいそうな話。  
 あいつ [合う・会う・遭う・逢う・逢う] (五自) ①物事が一つになり、離れていない、また矛盾がない。「合」①寄り集まって一つになる。「三筋の流れが一つに」って本流となる。「一」普通通他の動詞の連用形につけて使う。「友人と駅で落ち」  
 ②他の動詞の連用形を受けて、互いに同じ動作をする。「話し」なぐり「  
 ③互いには、一方が他方に、つり合う。「お前の手に」相手では、ない」(び)つたりする。調和する。「帽子の色と服の色がよく」服が体に「一」一致する。「意見が」理にかなう。「答えが」費やしたものに、対し、損をしない結果が出る。引き合う。「千円に見切っても